

クライスト没後二百年に（コト）よせて（M. Manabe）[J]

今年プロイセンの劇作家、ジャーナリストそして小説家であったハインリヒ・フォン・クライスト(Heinrich von Kleist, 1777-1811)の没後二百年にあたる記念の年、「クライスト年」です。それにともなってドイツ各地でクライストの戯曲作品を集中的に上演する複数の企画が進行しており（[注1](#)、[注1'](#)、[注1''](#)）、クライスト関連のシンポジウムもドイツ国内のみならずアメリカを始めとして世界各地で開催されています。クライスト関連の研究書、文芸作品の出版も数多く見られ、クライスト全集として、新たにミュンヘン版（[注2](#)）も出版されました。この全集は、原資料をできる限り収録し、文献学的な註を充実させた大部のブランデンブルク・ベルリン版クライスト全集を、読者が手にとって読みやすいように簡略化した普及版です。

この「クライスト年」にちなんで日本でも、ゲーテ・インスティテュート東京の主催で、林立騎氏によって企画された四回にわたる非常に興味深い催し物がありました。（[注3](#)）クライストの最期を『Xファイル』よろしく再現VTRによってミステリ仕立てで解説した映像作品『クライスト—ある作家の死の記録—』*Die Akte Kleist*の上映、大宮勘一郎氏のクライストのアクチュアリティに関する講演「クライスト2001/2011—21世紀最初の10年とクライストの諸作品—」、ポストモダン演劇研究の大家ハンス=ティース・レーマン氏と林氏とのトークセッション「クライストと演劇」、多和田葉子氏による「クライスト年」に寄せて書き下ろされたエッセイ『日本語のクライスト』の朗読です。クライスト自身が同時代の歴史的・社会的な変化によって揺さぶられていたと同時に、クライストのテキストを読むことで、作家の同時代の読者のみならず、さらに現代の読者までもが揺さぶりをうけることになる。それゆえ、資料が少ないために謎が多いクライスト像と、彼のテキストの可能性を固定してしまうのではなく、むしろ、既存の「読み方」を揺さぶって新たな可能性を汲んでいくことを目指すべきだ、というのが林氏の構想であると理解しました。

では、少し見方を変えて、没年としての「クライスト年」を迎える意味について考えてみたいと思います。クライストの誕生を祝いことほぐ「生年」と、彼の死を想う「没年」とでは、少しばかり記念の思いの味わいが異なると思われるからです。特にクライストにおいてはそう思われます。

今から二百年前の11月21日午後四時過ぎ、三十四歳のクライストはポツダム近郊の小ヴァン湖畔で、プロイセン政府会計業務ベルリン地区担当官吏フリードリヒ・ルートヴィヒ・フォーゲル氏の人妻ヘンリエッテ・フォーゲルの胸をピストルで撃ち、自身もピストルを啜って発砲し、命を絶ちました。その死の直前、二人は滞在していた近くの宿屋「(シュティムングの) 甕亭」からテーブル、椅子、そしてコーヒーとラム酒を湖畔に届けさせており、はしゃいだ声すら聞こえてきた、と宿屋の主人は証言しています。その後、二発の銃声が出て、二人の遺体が発見されました。ヘンリエッテは仰向けに手を組んでおり、クライストは彼女に向かって屈みこむ姿勢でした。翌日に作成された検死報告書には、「男性の遺体」〔クライスト〕が自身に撃った弾丸は口腔内で上方に発射され、その舌も歯も傷つけることがなかった、またその他一切の疾患も外傷も見つからなかったため、頭蓋内部に突き刺さって留まったこの豆粒大(3/4Lot=12.75g程度)の鉛が脳組織を破壊したことが死因なのは明らかである、と記されています。女性の遺体にも争った形跡は見あたらず、乱れない着衣の左胸部にできた焦げ痕と小さな血痕が示すとおり、至近距

離からの発砲が心臓組織を破壊したのが死因でした。解剖により遺体の子宮からは腫瘍状の硬化した組織が発見されましたが、それが致死性のものだったかどうかは定かではありません。彼女が配偶者へ宛てた書簡には、病気のことや、あれこれの現実上の困難が死を望む理由だった、この望みを叶えてくれると約束してくれたクライストと出会った、とあります。クライストもまた自身のことを、この世では救いようのない人間である、ともっとも仲のよかった異母姉のウルリケに書き送っています。人生に絶望していたのです。

1811年当時、同時代の読者から認められず、クライストは経済的困窮に苦悩していました。自らが発行する日刊新聞『ベルリント刊新聞』も、アクチュアルな犯罪事件情報の提供をうけていた管轄の警察署からの協力が打ち切られて人気を失い、廃刊に追い込まれます。一度は背を向けた（数多くの高位の将校を輩出していたクライスト家の家業ともいえる）プロイセン軍の士官の道を、経済的困窮から再び選ばざるをえませんでした。プロイセン王妃ルイーゼの元侍女で、クライストが敬愛していた義理の従姉妹マリー・フォン・クライストから王家へなされた口添えも功を奏さず、軍に復職することはできませんでした。援助の手を差し伸べ続けてくれていたマリーに対してクライストは、あなたが一緒に死んでくれなかったから、自分はこのすばらしい女性ヘンリエッテ・フォーゲルとともに来世へ向かうのです、と書簡で述べています。ヘンリエッテもまた、自身の死によって妻と母を失うことになる夫と娘への愛情について、その遺書となる書簡で明確に口にしていますから（それが気休めの嘘であったにせよ）、二人は互いに、自身にふさわしいと思われた相手とは別人の手をとって死出の旅に出たこととなります。

クライストは、もっとも望んだ女性ではなく、その代替となる女性とともに幸福な来世へと旅立つことを夢見て、さらに夢見るだけでなく、それを実行に移したように思えます。現実の成功の代替物を求めて、恋人の代替者とともに、代替となる世界（現世ではなく来世）へ向かうのですから、「ほんらい求めたものとは別の方向へ進む」という筋書きを、まさに何重にも重ね合わせた演出が、ここには施されています。これは小説や戯曲のなかの話ではありませんから、彼はじっさいに現実の材料を用いて、自らをその筋立ての内部に配して、死出の旅の物語を実体化して見せたこととなります。彼は言葉ではなく、自身を取り囲む現実を材料にして物語を（じっさいに書くことなく）「書いた」のだ、と思われま。2011年11月21日付FAZインターネット版文芸欄記事「その人生から（出でし）」*Aus dem Leben*でフォルカー・ヴァイダーマンVolker Weidemannは、クライストのこの死の様子が、彼の作品中で描かれるいくつかの死の状況と似通っている、と指摘しています。（注4）命の恩人で愛していたはずのトーニを誤解から撃ち殺し、自ら頭を撃って自殺する『聖ドミンゴの婚約』のグスタフ（=アウグスト）や、自らの処刑後の来世の浄福を夢見る公子フリードリヒ・フォン・ホンブルクが、作者クライストの死の情景と二重写しに見えてきますし、恋い焦がれたアキレウスのメッセージを正反対の内容に誤解して激昂し、忘我の状態を彼を惨殺した後、自死を表現したその言葉通りに、じっさいに舞台上で死んでしまうペンテジレーアもまた、（自死の）言葉と行為を一つにしてしまう存在でした。

クライストの作品群とその現実の人生の最期の場面においては、「言葉」と「事柄」が奇妙に通じ合って近づき、虚構と現実は一挙に重ね合わされてしまいます。コトバとコトはニテイマスノデ。クライストにおける、この「詩と真実」のあいだにある境界の侵蝕は、現実という固い地盤に立っている、と信じて疑わない第三者の安寧秩序をも侵蝕しか

ねません。クライストの演じた死に様という「現実」（の報道）は、その悲報を耳にした人々のうち、クライストの作品を読んだことのある読者、そして特にウルリケとマリー、さらに幾人かの親しい友人たちに、ある種の困惑を生じさせるはずのものだったのではないのでしょうか。クライストの作品群という「虚構」のなかに見出されたいくつかの構造は、彼の「現実」の死の有り様と近似している。そう感じた者の現実感虚構を前にした感覚とすり替えられて攪乱され、眩暈にも似た感覚が呼び起こされるはずだ、と。カスパー・ダーフィット・フリードリヒの『海辺の修道士』（注5）には、荒涼たる海原を前にして立つ修道士の後姿が描かれています。この人物は、水平線の彼方の到達不可能な場所への憧憬を抱いている、とクライストは解釈し、そこに描きこまれた心境を賞賛しました。しかし、現実の複製にすぎないこの絵画を前にしても同様の憧憬に悩まされる、と彼は考えます。現実と芸術（虚構）のあいだにも越え難い断絶があるからです。ならば実物の材料を用いて現実を描き、現実認識と擬似認識を完璧にすり替えることが出来る芸術作品を作れば、この断絶を乗り越えられるかもしれない、野生の狼すらそれを本物と取り違えて遠吠えしかねない、と彼は思わせぶりの示唆をしていたことが思い出されます。

だとしても、人気はなかったとはいえ作家としては当時有名人であり、武官の名門の一員であるクライストが反社会的・反キリスト教的な事件を起こすという醜聞を、反動的で体面を重んじるプロイセン当局が許しておくはずがありませんでした。二度目の検死報告で彼は、胆汁質ゆえに心気症に悩まされていたと分析され、そのせいで一線を越えた病質者と認定されて、彼の訃報そのものが社会にとってはイレギュラーなものとして無害化されていったのです。クライストの自死のおよそ三十年前には「ウェルテル」を模倣した自殺者が多数存在した一方で、だからこそ、虚構と現実を切り分けて謹厳に実社会を生き抜くことが健康で成熟した人間の態度とみなされていました。クライストの作品と人生は謎であり、不気味なものと思われ、その自死は病的なものとして不問に付されました。

そういうわけで、別の作家であればその生涯に思いを馳せ、作品を読み返して再評価するきっかけにもなろう日付としての記念年（没年）の「命日」は、クライストにおいてはそれに加えて、彼自身が手を下した、現実の生々しい、自身と他者の二重の殺人を想起させる契機となっています。それは、公序良俗の通用しない遙か彼方にまで突出する過激な暴力と謎、そして「コトバ」と「コト」を強引に一つに重ね合わせてしまうクライストの演出の、その記念碑となっているのです。そう、読めてしまいます。しかし、クライストにおいてはじつは、この「そう読めてしまう」と感じる心理ほど危険な状態もありません。読者にとっては意義深く魅力的な解釈が、彼のテキストにはいたるところ撒き散らされていますが、そういった、往々にして我田引水となる恣意的な解釈を皮肉に嘲笑う言説もまた、クライストのエッセイや書簡には繰り返し登場するのですから。たとえば『神の鉄筆』では、落雷で溶け乱れた墓碑銘にかろうじて残ったいくつかの文字から、勧善懲悪を示唆する神的なメッセージを読みたがる者たちとして、「律法学者」がさりげなく皮肉られています。そして『チリの地震』の地震と、それが生じせしめたドミニコ会系教会の天蓋の亀裂が、当事者たちにとって肯定的と否定的の、両極端に解釈されたことは、ワレワレの現実とも不気味に接合して、記憶に新しいことでしょう。

ゲーテやシラーの作品が時代がかったものと感じられる一方で、クライストの作品群は現代の読者にとって近いと感じられるだろう、と前述のFAZインターネット版の文芸欄筆者ヴァイダーマンは結んでいます。クライストの諸作品は生き残りました。ロマン主義

的なモチーフが散りばめられた『ハイルブロンンのケートヒェン』は十九世紀を通して、ナポレオン戦争後に急速にドイツ愛国主義的な志向を強めていったドイツ語圏の各地の劇場で人気を博していったのです。普仏戦争後のドイツ帝国成立のさい、そして第一次世界大戦の前後と第二次世界大戦にわたって『ヘルマンの戦い』といったクライストの愛国的な作品がプロパガンダとして利用され、その知名度を高めていきました。知名度の高まりと比例して、十九世紀末からようやくクライストのテキストそれぞれと真摯に向き合う態度が生まれてきました。ゲーテ、シラー、ヘルダーといった理性的で健康な古典主義のカノン（規範的文獻）にかわり、ヘルダーリン、ビュヒナーらと並んでクライストは、合理性や調和の届かない世界（理性の裏面）を描き出す、もう一つの近代を象徴する新たなカノンをなす作家の一人となりました。『ペンテジレア』をはじめとして、作中で爆発する「感情」の表現に注目が集まり、第二次大戦後は愛国主義的な側面よりも、クライストの諸作品にみられる特異な言語表現の分析に力が注がれていき、六十年代の学生運動時には『ミヒャエル・コールハース』に代表されるように、既存の権威による不当な抑圧への反抗の狼煙として彼の作品が読まれていきます。方法論の多種乱立が意識され始めた八十年代以降には、記号論やディスクール分析、メディア論、システム理論を応用した多様な分析方法でクライストのテキストを読む試みが登場してきています。現在もクライストは読み継がれています。

1998年、ミュンヘン留学時の私は、資料漁りにクライストの生地オーダー河畔のフランクフルトにある、その生家を改築したクライスト・ミュージアム（注6）と、そこから歩いて十分程度のクライスト図書館（注7）を訪ねたことがあります。クライスト図書館は、建物も役所然としていて、クライスト研究の専門家以外が出入りすることはなさそうな雰囲気でした。さらに同年、ハイルブロン市の繁華街の中心部、ショッピング・モール「テアター・フォーラム」（注8）内のテナントの一つ、K3にあるゼムトナー・クライスト資料館事務所（注9）と、そこに隣接する劇場「コメディ・ハウス」（注10）にも足を運びました。その立地が示すとおり、ハイルブロンンのクライスト資料館の開放性と商業性には驚かされました。責任者のギュンター・エーミヒ氏も非常に親切にして下さり、世界中からクライストの関連出版物が送付されてくる、僕は日本語が読めないけれど、君は日本から送られてくる『ニンギョウシバイ』という刊行物の関係者か？とも質問されました。その都市論的な意味合いもさることながら、「クライスト」と「ショッピング・モール」の組み合わせは、なんだか対極のもの同士に思われ、東と西のクライスト・アーカイヴで、これほどのコントラストが浮かび上がるのも面白いな、と思いました。

最後に、みなさんもよくご存知の動画掲載サイトYouTube（注11）で、「heinrich von kleist」とキーワードを入力して動画検索をかけてみるとどうなるか（注12）、最新のクライスト受容の現実についてお知らせしたいと思います。個々の作品名でも結構です。すると、クライスト作品の劇場での舞台上演の一部を撮影した予告映像や、朗読商品の断片などが見つかるでしょう。検索の糸をさらに手繰っていくと、いくつか不可解な映像に出会うことと思います。演技についてはズブの素人と思しき生徒たちが面白半分自主制作したような、クライスト作品のダイジェスト版（注13）のような映像群です。なかにはLegoを用いた人形劇（注14）のようなものもあり、話の粗筋を示すために作られたように思われる出来のものも多いのです。それらの映像の作者コメント欄には、「試験頑張ってる」や「アビ（トゥア）〔ギムナジウム修了・大学入学資格試験〕対策」のようなメッセー

ジが見つかったりもします。つまり、クライストの諸作品は「ドイツ語」の授業〔われわれにとっての「国語」〕の教程内容に組み込まれているので、実物のテキストを読むかわりに、これらの映像を見て試験対策にその粗筋を記憶に残す生徒たちもいれば、学校の課題としてこのような映像を作る者もいるというわけです。彼らにとってもクライストの文章は難解らしく、昨年発売されたApple社の、当時最薄のSSD搭載ノートPC「MacBook Air」の商業映像（注15）をそのままパロディにして皮肉っている映像もあります。オリジナルのCMでは、スタイリッシュなBGM(Yael Naim& David Donatien: "New Soul")とともにA4サイズの封筒からPCが取り出され、デモンストレーションが行われた後に「MacBook Air、世界最薄のノートPC」というキャプションが入るのですが、パロディ映像（注16）では同様の封筒から、読み込まれてくたびれたペーパーバックの『ミヒヤエル・コールハース』が取り出され、ページの端に描かれた拙いパラパラ漫画で「動画再生」(!)も可能なことが証明されると、「ミヒヤエル・コールハース、その時代で最も戦慄すべき本の一つ」というキャプションが入ります。『ミヒヤエル・コールハース』の冒頭、コールハースを語り手が「その時代で最も厳正で、同時に最も戦慄すべき男の一人」と形容していることにかけているわけです。この映像の作者は„Daniel S.“と記されていますが、映像に登場する彼の『コールハース』には、黄色の蛍光マーカーでたくさんの線が引かれていました。

眞鍋 正紀（上智大学非常勤講師）

0080

作成日：2011/12/09